

群 教 セ	G09 - 02
	平 15.212 集

目的意識をもって、積極的に 会話を継続しようとする生徒の育成

- 少人数英語学習における
A L Tとの1対1を主とした会話活動を通して -

特別研修員 藤井 美紀 (高崎市立片岡中学校)

《研究の概要》

本研究は、少人数英語学習における、A L Tとの1対1を主とした会話活動を通して、目的意識をもって、積極的に会話を継続しようとする生徒の育成を目指している。英語で話すことの楽しさを知ることから、あらかじめ準備した情報や自分の考えをわかりやすく伝えることを経て、最後に、既習の英語表現を使い、会話を継続することに挑戦する。これにより、目的意識をもって、積極的に会話を継続しようとする生徒の育成を図った。
【キーワード：英語 中 中高一貫 習熟度別学習 少人数学習 A L T 会話の継続】

主題設定の理由

英語教育の改善が強く求められ、その主な課題として「国際化への対応」が叫ばれてから久しい。英語を学ぶ日本人の中には、外国の人達と実際に向き合って、気軽な気持ちでコミュニケーションを楽しみたいと強く感じている人が多い。

本校の生徒は、習熟度別少人数学習になったことにより、A L Tと1対1で、英語を話す機会を多く持てる環境に置かれている。15人程度の少人数授業においては、ペアワークやグループワークを積極的に取り入れることにより、一人一人にたくさんの話す機会を与え、教師が活動の様子を確認して、個別指導することが質的にも量的にも容易になった。ところが、本研究の対象となる基礎クラスの生徒はA L Tと話したい気持ちはあっても、語彙の不足や話す技術の面で、会話を続けることが容易ではない。会話を目的やそれを表現するための豊富な語彙や英語特有の表現の仕方、尋ね方や答え方が、まだ十分に身につけていないと考えられる。

会話を継続する技術を学び、それを磨こうとするのであれば、個に応じて、覚えた表現を何度も繰り返して練習できたり、個に応じたペースで学習を進めることができることから、少人数学習の方が有効であると考え。また、生徒がA L Tと話すことにより、英語が使えることへの喜びや満足感を味わったり、自分の考えを伝えられる達成感を味わうことができる。このことは、生徒が積極的に会話を継続するために、大変効果的であると考え。

そこで、本研究は、A L Tとの1対1での会話活動を多く取り入れる。まず、生徒がA L Tに尋ねたい質問を用意し、A L Tと1対1で、一問一答形式の問答を行い、さらに、A L Tからの同様の質問にも答える。英語を使つての問答に慣れ、もっと話してみたいという、会話の継続への関心が高められると考えるからである。次に、個人あるいはペアで、A L Tと具体的なテーマに沿って、情報や意見を交換し合う活動を行う。自分と相手との情報を交換し合って比較する表現や、自分の考えを相手に伝えたりする表現を学び、相手にわかりやすく伝えられるように、会話の継続に対する意欲をもつようになると考えるからである。最後に、具体的なテーマに沿って、既習の英語表現を再度使いながら、「会話継続エクセサイズ」を行う。既習の表現であれば、会話の中での活用が容易であり、その表現を確実に習得しながら、積極的に会話を継続しようという態度を育成できると考えるからである。

以上のように、少人数英語学習におけるA L Tとの1対1を主とした会話活動を通して、目

(2) 習熟度別少人数英語学習（基礎クラス）におけるALTとの打ち合わせ内容

発展クラスと基礎クラスでは、ALTの役割が違う。発展クラスでは、ALTはたとえ日本語が話せても、故意に英語を多く使い、生徒にも、正確で適切な表現で、会話をするのが要求できる。しかし、基礎クラスの生徒には、手だてが必要である。間違いに対し寛容で、良くできたら大いに賞賛することができる教師側の態度も重要である。そこで、見通し1から見通し3の授業を行う時に、ALTの支援と工夫として、次のような内容を打ち合わせておく。

【見通し1～3】 ALTが授業中に行う 支援と工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の意欲化につなげるための活力ある質問の投げかけ ・生徒に安心感を与えるための受容的な態度 (アイコンタクト、相づち、間違いやつまずきなどに対する寛容さ) ・非言語による会話の継続の工夫（絵や写真、ジェスチャー） ・生徒の活動に対する多くの賞賛（声かけやスタンプ）
---------------------------------	---

また、生徒は段階ごとに、ALTとの会話文をワークシートに記入する。これは、会話を継続するために重要であるため、必ず次のように、ALTとJTEと一緒に話し合う。

段階	活動内容 (形態)	生徒があらかじめ書いた会話文に対する事前の打ち合わせ
見通し1	一問一答形式の会話活動 (個人)	<ul style="list-style-type: none"> ・正確で、適切な表現文にするためのALTからの手直し ・生徒の質問文に対してALTが答える内容について ・ALTから同様の質問が返せない場合の質問内容について ・座席表による抽出児の実態把握
見通し2	英国のスポーツや文化などについて、会話を継続する活動 (個人、またはペア)	<ul style="list-style-type: none"> ・正確で、適切な表現文にするためのALTからの手直し ・生徒の質問文に対してALTが答える内容や方法について (ALTが説明する時の実物や写真の提示の仕方など) ・英国のことでALTが詳しくわからない時の答え方について (生徒の会話への意欲を損なわずに、わかる範囲で答える。)
見通し3	英国のスポーツや文化などについて、「会話継続エクセサイズ」を行う活動 (個人)	<ul style="list-style-type: none"> ・正確で、適切な表現文にするためのALTからの手直し ・生徒の質問文に対してALTが答える内容や方法について (始まりと終わりの挨拶の文や相づちなども1回の会話に入れるなど) ・ALTに聞き返したり、つなぎ言葉や、2つ以上のテーマをつなぐ時の言葉(例、by the wayなど)を使えた時の賞賛について

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で授業実践を行い、検証する。

(1) 授業実践計画と検証計画

期 間	平成15年 9月9日(火)～25日(木) (8時間予定)
題材名	「英国のスポーツや文化などについて話し合おう」
対 象	高崎市立片岡中学校 2年3組 エssenシャルコース(男子12名、女子6名、計18名)

検証項目	検証の視点	検証の方法
見通し1	導入の過程において、普段から生徒がALTに対して興味を持っている身近な題材(好きな食べ物や趣味、片岡中など)について、ALTとの一問一答形式の会話活動を取り入れることは、英語で話すことの楽しさを知り、会話を続けることへの関心を高めることに有効であったか。	《会話活動状況の観察》 授業中とビデオによる取組の観察 《会話文の収集と分析》 ワークシートの記述と録音による会話文の掘り起こしと、準備と実際との差異の分析 《自己評価カードの分析》 「会話の楽しさ」と「会話継続への関心の高まり」を中心とした分析
見通し2	追求の過程において、個人、あるいはペアで、英国のスポーツや文化などについて、	《会話活動状況の観察》 授業中とビデオによる取組の観察

	There is ~. Is there ~? を用いて、ALTと英国と日本の文化を比較しながら情報を交換したり、I think ~. を用いて、互いの意見を交換し合う活動を取り入れることは、会話を継続しようとする意欲をもつことに有効であったか。	《会話文の収集と分析》 ワークシートの記述と録音による会話文の掘り起こしと、準備と実際との差異の分析 《自己評価カードの分析》 「会話を継続するための方法についての理解」と「会話をつなげることへの意欲」を中心とした分析 《相互評価カードの分析》 「友達の工夫した良い点」についての分析
見通し3	深化の過程において、英国のスポーツや文化について、既習の表現(There is ~. Is there ~? I think ~. など)を使いながら、ALTとの「会話継続エクセサイズ」の活動を取り入れることは、目的意識をもって、積極的に会話を継続しようとする態度を身につけることに有効であったか。	《会話活動状況の観察》 授業中とビデオによる取組の観察 《会話文の収集と分析》 ワークシートの記述と録音による会話文の掘り起こしと、準備と実際との差異の分析 《自己評価カードの分析》 「会話を継続するための方法についての理解」 《相互評価カードの分析》 「友達の工夫した良い点」についての分析

(2) 抽出生徒

A 男	授業に取り組む態度は意欲的で、教科書の文を正確に音読できる。文法事項も理解でき、言語材料を用いて適切な表現で話したり、書いたりできる。まとまった文章の内容を聞いて、大要を理解したり、発想豊かで、独自の内容で話したりもできる。しかし、内気な性格で、小さな声で話す。ALTと話すことは好きで、自分の好きなテーマであれば、会話が継続できると考えられる。自信をもって話せるように励ましたり、会話を継続する方法を身につけられるように、一緒に考えたりすることにより、支援していきたい。
B 男	教科書の文章については、単語にふりがなをつけながらも、一つ一つ丁寧に読み進めることができる。単語や文章を正確に聞いたり、書いたりすることは苦手だが、教師の助言を素直に聞いて、根気よく努力しようとする。ALTと話すことには興味をもっており、コミュニケーション活動では、何度も練習をした文章については流暢に話せる。JTEが会話文の作成や音読練習を支援し、ALTが受容的な態度で問答することで支援に努める。

研究の展開

1 題材の考察と目標

題材の考察	本題材は、英国のスポーツや文化などについて、ALTとの会話活動を通して、学習指導要領の『(1) 言語活動、ウ、話すこと(エ)』を達成し、積極的に会話を継続しようとする態度を身につけることをねらいとしている。本題材で学ぶ新出言語材料は、There is (are) ~. という「物や出来事などの存在の有無を表す表現」と「I think ~.」という「自分の意見を言う表現」である。言語活動の中では、There is ~. Is there ~? の表現を使って、「日本には、～があります。英国には、～がありますか。」という、日本と英国の比較を表す文を作り、I think ~. Do you think ~? What do you think? を使って、その話しているテーマについて、ALTと自分の意見を交換し合う。これにより、日本と英国の文化やスポーツなどについて、様々な相違点や共通点を知ることができる。また、グローバル化が進み、世界の多くの人々と意見の交換をする機会が増えている昨今、自分の意見を積極的に他者に伝えようとする態度を身につけることは、意義あることと考える。教科書の内容は、久美とMaryがEメールを交換し合う形式となっており、The UKの4つの国は互いに独立しており、サッカーの公式試合も行われ、使用する言葉についても、それぞれ異なっていることなどを知ることができる。我が校のALTは、イングランド出身であり、生徒はALTと話すことにより、The UKの生の情報を取り入れることができる。したがって、教科書の内容について深めたり、さらに別の情報についてALTと話し合うことは、会話に対する興味・関心を高め、目的意識を持って会話を継続しようとする生徒を育成することに適切であると考えられる。導入の過程では、ALTと一問一答形式での、簡単な問答の仕方に慣れ、「追求」の過程では、「英国のスポーツや文化など」について、個人あるいはペアで、物の所在を表す表現と自分の意見を言う表現を用いながら、相手にわかりやすく会話を継続する方法を学び、「深化」の過程では、既習の方法を用いて、『会話継続エクセサイズ』を行うことにより、互いに学び合いながら、目的意識を持って自分の力を試す。これらの活動を通して、英語を使って、積極的に会話を継続しようとする態度を育てることができる。と考える。
目標	・ALTとの会話活動に積極的に取り組もうとしている。 ・There is ~, I think ~の表現を用いて、自分の伝えようとする内容をALTにわかるように話そうとしている。 ・ALTが話している内容を正しく聞いて、理解しようとしている。 ・英国と日本の文化やスポーツなどの相違点を理解しようとしている。

2 評価規準

	評価規準	おおむね満足できる	十分満足できる
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	・ A L T との会話活動に積極的に取り組もうとしている。 ・ A L T との「会話継続エクセサイズ」に挑戦し、会話の回数を伸ばそうとしている。	・ 間違うことを恐れず、自分の書いた会話文を言おうとしている。 ・ 既習の表現を用いて、5 回以上の会話を継続している。	・ 会話文を見ずに、アイコンタクトや相づちを用いながら、進んで会話している。 ・ 既習の表現や、文と文をつなぐ表現を用いながら、7 回以上の会話を継続している。
表現の能力	・ A L T との会話が継続するように、様々な工夫をしながら問答しようとしている。 ・ 会話活動をする時、英語の音声に注意して、正しく言おうとしている。	・ うなずいたり、相手の話にうまく反応するなど、適切な表現を用いて、問答しようとしている。 ・ リズム、イントネーション、区切りなどに注意して、正しく言おうとしている。	・ つなぎ言葉を用いたり、うなずいたり、絵やジェスチャーを積極的に用いて伝えようとしている。 ・ 強勢、リズム、イントネーション、区切りに注意し、相手に伝わる声の大きさを、正確に言える。
理解の能力	・ A L T の話している内容を正しく理解しようとしている。 ・ A L T に聞き返すなどして、内容を確認しようとしている。	・ A L T が話していることの大切な部分を聞き取ろうとしている。 ・ A L T の話している内容がわからない時は、「Pardon ?」を使って聞き返そうとしている。	・ A L T の話している内容の大部分を理解し、正確に書いている。 ・ 疑問に思ったことを質問したり、わからないことを聞き返したりしようとしている。
言語・文化に関する知識・理解	・ 新出言語材料の使い方を理解し、場面にふさわしい運用ができる。 ・ A L T と自分、日本と英国との物の見方や考え方の違いを理解しようとしている。	・ There is ~. を用いて、互いの国の文化を比べたり、I think ~. を用いて、意見を述べたりしている。 ・ 異文化について興味を持って受け入れ、日本との相違点について気づいたりしている。	・ There is ~. I think ~. What do you think ~? を用いて、その場面にふさわしい問答をしている。 ・ 異文化に興味を持ち、日本の文化との相違点を考えると共に、それについて A L T に質問できる。

3 指導計画 『英国のスポーツや文化などについて話し合おう』(8 時間予定)

過程	時間	学習活動 【見通し】	支援及び指導上の留意点	評価項目 【主となる観点】
導入	2	・ A L T への質問を考え、それと同じ質問に対する自分の答え方を考え、練習する。	・ 英語を話すことへの緊張を緩和するため、ワークシートを用意し、生徒が A L T に質問したいことを 1 つ記入し、練習できるようにする。 ・ A L T への質問内容については、考えた質問と同様の質問が返ってくることを伝え、A L T からの答えを予想して答えられるように指示する。	・ A L T への質問を考え、練習している。 【理解】
	1	・ 『Shotgun Practice』の活動を通して、会話を継続するのに必要な語句や表現を覚える。 ・ A L T と一問一答形式の問答をする。 【見通し 1】 ・ 自分の行った会話の内容をワークシートに記入する。また、自己評価をする。	・ 『Shotgun Practice』のワークシートには、生徒が会話活動を続ける上で、頻繁に使用する英語表現をなるべく多く載せ、練習できるようにする。 ・ A L T との会話活動の前には、練習の時間を取り、つまづいてしまう生徒には、個に応じた支援をする。 ・ A L T に同じような質問を返された時、反応良く応答できるように、答えを予測するように指示する。また、A L T にも、生徒の質問内容を見せておく。 ・ ワークシートを見てもよいとし、わからない言葉や表現については、ジェスチャーや日本語を使用してもよしとする。 ・ 聞き取れた内容でも、生徒の実態から、書こうとしても書けないことがあるので、個に応じた支援をし、辞書をひく指導をする。どうしてもわからないことについては、その部分だけを日本語で書いてもよしとする。	・ A L T と積極的に問答をしている。 【関心・意欲・態度】 B: 間違いを恐れずに会話文が言える。 A: 会話文を見ずに、相づちやアイコンタクトを用いながら、進んで会話をしている。
追求	2	・ 聞き返す表現、相手の話にうまく反応する表現、具体的に詳しく説明する時の表現を覚える。 ・ 『Shotgun Practice』により、There is(are) ~ , Is(Are) there ~? , I think ~ の新出言語材料を用いた文を練習する。 ・ 見通し 2 の授業に備えて、ワークシートに自分の話したいトピックを考えて書き、練習する。	・ なるべく、場面ごとにまとめて分類し、簡単な表現から覚えられるように工夫する。 ・ どの場面で、どの表現を活用するかを、実際に教師が対話のデモンストレーションなどを取り入れながら示しておく。 ・ 新出言語材料の習得をねらいとしているので、繰り返し、声に出して練習する。 ・ There is(are) ~ , Is(Are) there ~? , I think ~ の新出言語材料を使いながら、英国のスポーツや文化について、簡単な問答を継続できるよう促す。 ・ 机間指導をして、新出言語材料を用いて、正しく書いているかを確認する。	・ 聞き返しの表現、相手に反応する表現、具体的に詳しく説明する時の表現などを理解しようとしている。 【理解】 ・ 新出言語材料の用い方を知り、文を正しく言っている。 【表現】 ・ 新出言語材料を用いて、文を正しく書いている。 【知識・理解】
	1	・ 『Shotgun Practice』により、前時の新出言語材料の復習をする。 ・ A L T と J T E の会話を聞いて、大要をつかむ。 ・ 英国のスポーツや文化(音楽、食物、絵画)自然などについて、A L T と会話を続ける。 【見通し 2】	・ ベアで楽しくできるように、また、大きな声で言えるように、音楽を流しながら活動する。 ・ 英国の保存食であるマーマイトを使い、日本の納豆と比較しながら、会話を進める。この時、生徒が後で、新出言語材料を用いて説明したり、自分の意見がきちんと言えるように、わかりやすくデモンストレーションをする。 ・ 会話活動の前は、十分に練習時間を取り、話すことにつまづいている生徒を支援する。 ・ 会話活動をする時、A L T は、生徒にわかりやすい説明ができるように心がけ、絵やジェスチャーなどを用いて、視覚に訴える提示ができるようにする。 ・ 友達の良い表現方法や興味深い内容について学べるように、相互評価カードを記入しながら会話活動を聞く。	・ A L T との会話が継続するように工夫している。 【表現】 B: うなずいたり、相手の話にうまく反応するなど、適切な表現を用いて問答しようとしている。 A: つなぎ言葉を用いたり、うなずいたり、絵やジェスチャーを積極的に用いて伝えようとしている。

		・ A L T と話した内容をワークシートに記入し、自己評価カードを書く。	・ 話した内容について記入する時は、できれば英語がいいが、難しい表現である時は生徒の実態を考えて、日本語をまぜて書いてもよいことにする。	
	1	・ 見通し 3 の授業に備えて、会話活動のための英文を考え、ワークシートに記入し、練習する。	・ なるべく見通し 2 で学んだ表現を取り入れながら会話が続けられるように、似たような表現や流れでワークシートを作成しておく。	・ 見通し 3 に備え、A L T との会話文が、書けている。 【表現】
深化	1	・ 英国のスポーツや文化についての『会話継続エクササイズ』に挑戦し、どれだけ会話を継続することができるかを試す。 【見通し 3】	・ 活動の内容や方法、評価の観点などについて説明し、相互評価カードを配って互いに良い点を評価できるように促す。 ・ A L T の助言や評価を参考にして、次の活動の目標をもったり、友達同士で良い点を賞賛して意欲化を図る。 ・ A L T は、生徒が安心して話せるような雰囲気作りに努め、わかりやすい表現で話すように心がける。 ・ J T E は、会話がつまずきそうな生徒がいたら、支援する。	・ A L T との会話の回数を伸ばそうとしている。 【関心・意欲・態度】 B: 既習の文で、5 回以上の会話を継続している。 A: 既習の表現や文と文をつなぐ表現を用いながら、進んで会話を継続している。

研究の結果と考察

1 導入の過程において、A L T と 1 対 1 で行う一問一答形式の会話活動を取り入れることは、問答することの楽しさを知り、会話を続けることへの関心を高めるために有効であったか

最初に、会話活動に必要な基本構文を復習するために、ペアワークで、『ショットガンブラクティス』（重要基本構文を覚えるためのドリル式補助教材を用いた活動、資料編参照）を行った。次に、あらかじめ書いておいた A L T との会話文を練習してから、一問一答の会話活動を行った。

A 男は、「A L T との会話の楽しさ」については、自己評価に B をつけたが、会話を続けることへの関心を高めたと考えられる。その理由は、A 男は授業後の感想で、「とても簡単だったので物足りなかった。もう少し話したかった。」と答えたからである。A 男は、日本語の上手な A L T に興味を示し、「When do you study Japanese?」という質問文を迷わずに考えた。J T E は、大きい声で、自信をもって話すように励まし、会話がうまく継続するように、A L T からの質問を予想しておくように助言した。授業中の観察と録音から、A 男は、正確な文で、しかも、落ち着いた態度で A L T に質問し、A L T の質問「When do you study English?」に対しても予想してあり、「I study English on Sundays.」と即座に答えた。A 男の感想の言葉は、会話の内容や様子からも真実であると考えられる。

B 男は、自己評価の結果より、「A L T との会話の楽しさ」について、AA をつけた。

また、A L T との会話を続けることへの関心は十分に高まったのではないかと考える。その理由は次のようである。

B 男は、J T E の支援を得て質問文を考え、音読練習をした。だが、見通し 1 の活動では緊張して、資料 1 のように Why と When を間違えた。また、B 男は J T E と共に、資料 2 のように、A L T からの質問文を予想したが、B 男の緊張の様子を見た A L T は、打ち合わせと違う の文を質問した。ところが、B 男は準備した自分の答えの文を言うことで、一生懸命に会

【資料 1】

B 男: When did you become an ALT ?

(Fujii: Why ?)

B 男: Why ?

ALT: Why ? Ah... Because Ah... I like teaching English.
Do you like studying English ?

B 男: Yes, I do. But don't like English so much.

ALT: Ah... Ok. Thank you very much.

【資料 2】

ALT Do you enjoy studying
English with me?
STUDENT Yes, I do. I don't like
English so much.

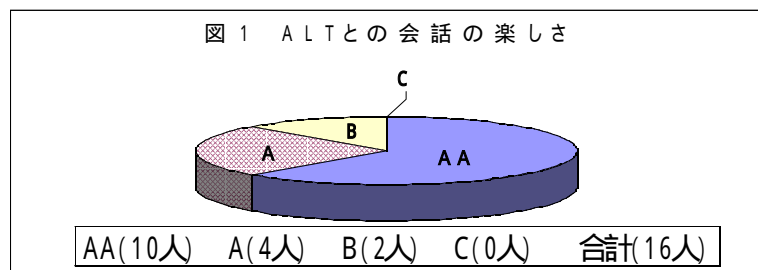
話を続けようとしたので、少し焦点がずれた内容の答え（ ）になった。B男が、意欲的に会話をつなげようとしたのは、B男が、たとえ間違った英語を話しても、ALTが推測しながら、ゆっくりと聞き、間違いを強くとがめなかったからである。B男は、間違いはしたが、自分の英語で、ALTとの会話がつなげられたことに、大きな喜びと満足感を味わえたと考えられる。

クラス全体（習熟度別少人数基本クラス 32 人中 18 人、本校では通称『エッセンシャルコース』、以後Eクラス）でも、生徒の自己評価の集計結果である図1「ALT との会話の楽しさ」から明らかなように、ALT との会話を楽しむことができ、会話を続けることへの関心は高まったと考えられる。その理由として、短い文で簡単に問答ができたので、生徒に理解しやすかったことや、日常生活の中で、各自が興味のあるテーマを選んで問答できたことに対する満足感があげられる。中には、人気アニメーション「トトロ」の説明をする時、黒板に絵を描いて説明した者がいた。非言語的なコミュニケーションをうまく使用した例であり、他の良い参考例となった。

以上のことから、導入の過程において、ALT と1対1で行う一問一答の会話活動を取り入れることは、問答することの楽しさを知り、会話を続けることへの関心を高めるために有効であったと考えられる。

AA とても楽しい
A 楽しい
B 少し楽しい
C あまり楽しくない

* 基礎クラス対象の生徒のため、より
励みになるように、AAの項目を設けた。



2 追求の過程において、個人あるいはペアワークで、ALT との具体的なテーマに沿って、情報や意見を交換し合う会話活動を取り入れることは、生徒があらかじめ準備した情報や考えをわかりやすく相手に伝えながら、会話を継続しようとする意欲をもつために有効であったか

前の時間に、生徒がワークシートに記入したALT との会話文をペアで練習し、その後、個人あるいはペアで、ALT と「英国のスポーツや文化など」についての会話活動を行った。

【資料3】 ALT とA男、B男の会話

A男: I like fishing very much.
B男: There are a lot of There are black bass in Japanese rivers.
ALT: Uh huh.
A男: There are .. The.. There are rainbow trout in Japanese rivers too.
ALT: Uh huh.
A男: Are there black bass and rainbow trout in England?
ALT: Ah... Yes, there are. Ah... people fish for rainbow trout in England.
A男: I think fishing is interesting.
ALT: Uh huh.
B男: I think fishing is fun.
ALT: Ok.
B男: What do you think?
A男: Do you think fishing is interesting and fun?
ALT: Ah... Ok. I do not go fishing. I do not go fishing. But someday I would like to.

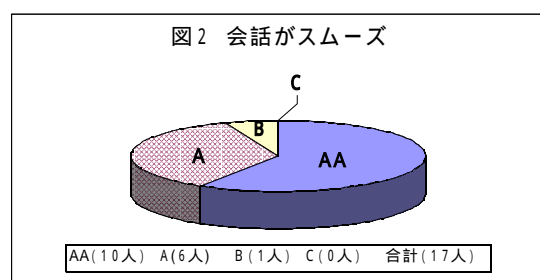
A男は、この活動を通して、あらかじめ準備した情報や自分の意見をわかりやすく相手に伝えながら、会話を継続しようとする意欲をもてたと考えられる。わかりやすく伝えられた第1の理由は、ALTからの聞き返しがなかったことである。資料3から、とに対して受容的に聞き、に対してイングランドの情報を返し、に対しては自分の気持ちを答えている。このことから、A男は、音声面でも、音量、発音、抑揚などが適切であり、ALTに正しく伝えられていると考える。第2の理由として、There are ~. I think ~. のキーセンテンスをうまく使い、内容の構成がよくできたことである。釣りに興味をもつA男が、最も尋ねたい質問は、資料3 とのALTの考

えである。あらかじめ会話文を準備する時は、JTEもA男の気持ちを考え、簡単な文を用いて表現できるように支援した。A男が自己評価で、「会話がスムーズ」についてAAをつけたことから、自然な会話の継続ができたと考えられる。また、A男は授業後に、「ペアでなく、1人でやってみたい。」と言い、自己評価の「ALTとの会話の楽しさ」についてもAをつけ、意欲の向上を表した。この活動で、ALTは、自分が釣りをしないにもかかわらず、相づち「Uh huh」によって生徒の話を受け入れ、安心して話せるように導いている。そして、生徒の気持ちを損なわないように、資料3の二重線の部分を英語で言い、日本語で、もう一度わかりやすく伝えた。このことは、生徒が意欲的に会話を継続するための大きな支援である。

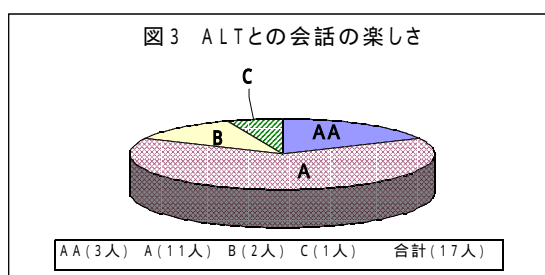
B男も、この活動により、わかりやすく伝えることを心がけながら、会話を継続しようとする意欲をもつことができた。なぜなら、準備段階から、自分が話す3つの文章をきちんとワークシートに記入し、音読練習に意欲的であったからである。JTEは、適切な音量、発音で、正しく伝えられるように支援した。B男は、何度も音読練習を重ねたことと、A男とのペアワークであることの安心感から、ALTに聞き返されることなく、3つの文章を伝えられた。中でも「What do you think?」は、とても流暢に発音良く話せた。これは、自己評価の「会話がスムーズ」の項目だけでなく、「ALTとの会話の楽しさ」についても、AAをつけたことから確認できる。また、ALTは、B男に対しても受容的な態度で接したので、資料3の内容を伝えるだけでなく、やの文では、簡単な文を用いて、ALTと意見を交換し合うことができた。この活動後のB男の表情は、笑顔で、満足そうであった。

Eクラス全体でも、わかりやすく伝えながら、会話を継続しようとする意欲をもつことができた。図2と図3から、「会話がスムーズ」で「楽しい」と感じた生徒が多かったからである。また、柔道選手のポスターや和菓子を見せるなど、実物を示してわかりやすく伝えようとする工夫ができた。相互評価カードからは、「ALTのサイズを表すジェスチャーが、わかりやすい。」や、「みんなが真剣に取り組んでいて良かった。」など、わかりやすい表現方法を他者の良い点から学び、意欲的に活動に取り組もうとする姿が読みとれた。

以上の事実を吟味すると、追求の過程において、個人あるいはペアワークで、ALTとの具体的なテーマに沿って、情報や意見を交換し合う会話活動を取り入れることは、あらかじめ生徒が準備した情報や考えをわかりやすく相手に伝えながら、会話を継続しようとする意欲をもつために有効であったと考えられる。



AA(とてもスムーズ) A(スムーズ)
B(ややスムーズ) C(あまりスムーズでない)



AA(とても楽しい) A(楽しい)
B(少し楽しい) C(あまり楽しくない)

3 深化の過程において、具体的なテーマに沿って、ALTと1対1で行う「会話継続エクセサイズ」を取り入れることは、既習の英語表現を使いながら、会話を続けることに挑戦し、目的意識をもって、積極的に会話を継続しようとする態度を身につけるために有効であったか

【資料4】JTEとA男の会話

A男: I like stag beetle very much.
 JTE: Uh huh.
 A男: Do you like stag beetle?
 JTE: Yes, I do.
 A男: There is stag beetle in Japanese mountains.
 JTE: Uh huh.
 A男: Is there stag beetle in England?
 JTE: Yes, there is. I think so.
 A男: I think stag beetle is cool.
 JTE: Uh huh.
 A男: What do you think?
 JTE: I think stag beetle is really cool.
 A男: By the way, I like snake too.
 snake too.
 JTE: Ah! (Laughing) Uh huh.
 * (以下省略、資料編参照)

【資料5】JTEとB男の会話

B男: I like soba very much.
 Do you like soba?
 JTE: Yes, I do. I like soba very much.
 B男: Do you like miso soup?
 JTE: Yes, I do. Ah! I eat...
 I eat miso soup every day.
 Do you understand?
 B男: (うなずく)
 I think miso soup is very much.
 What do you think?
 JTE: Yes, I think so too.
I think miso soup is very delicious.
 B男: That's all. Think... Ah...
 Take you.... very much.
 JTE: Thank you Thank you...
 B男: Thak you...
 JTE: Again. Thank you. Again.
 もう一度、言ってごらん。
 B男: Thank you.
 JTE: Thank you very much.
 B男: Thank you very much.

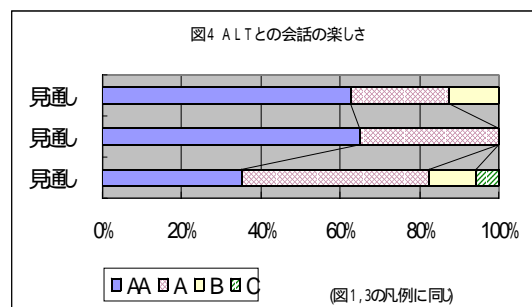
まず、ALTの事情により、突然、ALTとの授業が実施できなくなり、JTEが代役を努めた。机を円形に並べ、皆に生徒とJTEの様子がわかるようにした。生徒は、あらかじめ準備したALTとの会話文を練習した後、積極的に挙手した者から「会話継続エクセサイズ」を始めた。会話の始まりには、「Hi! Ms Fujii.」「Let's talk about ~.」、終わりには、「That's all. Thank you very much.」を使い、会話の回数に数えた。また、うなずきや相づちなども1回に数えた。

A男は、既習の英語表現を使い、目的意識をもって、積極的に会話を継続しようと努力した。その理由は、A男が興味をもつ「クワガタムシと蛇」の2つのテーマをBy the way(資料4)を用いて見事につなげ、より長い会話を継続しようとしたからである。A男は、準備段階から会話文の内容と構成について積極的に自力で考えた。だが、2つのテーマを両方言うための方法について、JTEに支援を求めてきたので、話題を転換する時の接続詞の役割を果たす言葉を一緒に考えた。相互評価カードには、「スラスラと言っていた。」「先生との会話がスムーズでよくわかった。」などの意見があった。自己評価では、「会話のつなげ方の理解」にAをつけており、15回の会話の継続に成功することができた。

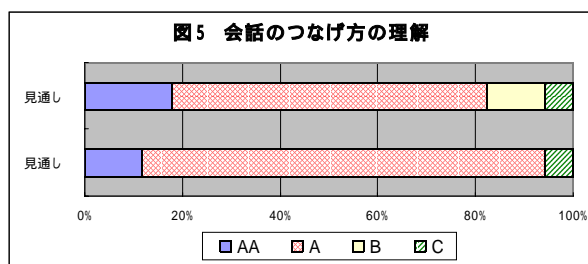
B男は、「そばとみそ汁」のテーマで、既習の英語表現を使い、積極的に会話を継続しようと努力した結果、5回以上の会話を継続することができた。B男は、身近で、親しみやすい日本料理

についてのテーマを考えていたので、JTEは活動前、B男にとって、音読練習やALTとの問答が容易にできることを考慮し、比較的簡単な「Do you like ~?」を用いて文を作れるように支援した。また、活動中も、B男が間違えた資料5の波線部を「delicious」であると推測して を答え、とにかく会話が継続できるように支援した。B男も、資料5との「That's all.」までは、既習の英語表現を使って、少し間違えながらも、積極的に会話を継続しようとしている。だが、その次の簡単な表現である「Thank you very much.」が、なかなか言えなかった。授業後の感想で、「前より練習不足だった。言い直すことはいやではなかったが、簡単な表現が言えなくて悔しかった。」と自分の気持ちを正直に表した。

Eクラス全体について見ると、どの生徒も各自のテーマに沿って既習の表現を使い、積極的に5回以上の会話の継続ができた。しかし、生徒の自己評価の集計結果である図4から、会話が楽しいと感じた者の割合



は減少している。ALTとの会話を楽しみに、伝えたい文を練習するなどの準備をしたにもかかわらず、会話ができなかったことに対する生徒の残念な気持ちがわかる。また、生徒が、ALTの活力ある、楽しい人柄に親しみをもち、互いに良い人間関係を築いているとも考えられる。一方、図5「会話のつなげ方の理解」については、よく理解している者の割合が増加している。（見通し については、一問一答の会話活動のため、自己評価の質問項目から省いた。）このことから、各自のテーマに沿って目的意識をもち、会話文の内容や構成を考えながら、より長く会話を続けることに挑戦し、積極的に会話を継続しようとする態度が育ってきたのではないかと考える。



AA (とてもよく理解できる) A (よく理解できる)
B (少し理解できる) C (あまり理解できない)

以上の事実をよく吟味してみると、深化の過程で、具体的なテーマに沿って、ALTと1対1で行う「会話継続エクセサイズ」を取り入れることは、既習の英語表現を使いながら、会話を続けることに挑戦し、目的意識を持って、積極的に会話を継続しようとする態度を身につけるために、有効であったと考えられる。

研究のまとめと今後の課題

生徒各自が、ALTと1対1で話す機会を多くもつことは、個に応じたテーマやペースで会話でき、英語で話すことの楽しさを知り、会話を継続することへの意欲を高めるために有効であった。また、生徒が意欲的にALTと会話を行うためには、生徒の実態を把握し、JTEとALTが、事前事後の打ち合わせを充実させることが極めて重要であると考えられる。

すなわち、基礎クラスの生徒が会話を継続するためには、興味のある話題を選択し、楽しい雰囲気の中で、ALTが受容的な態度で生徒の話を受け入れ、会話の表現を示しながら、JTEと共に、個に応じた指導をしていくことが大切であると考えられる。

中央中等教育学校の英語の授業は、15人程度の少人数学習で、常にALTとのチームティーチングで行われる。基礎期(1, 2年)では、コミュニケーション能力の基礎を確立することを目指し、活動の中でコミュニケーションの楽しさを味わうことを重視している。本研究の対象は、英語を苦手とする生徒であったが、ALTとの会話に興味をもち、楽しみながら会話を継続することができた。したがって、英語への興味・関心が強い中央中等教育学校(基礎期)の1年生の段階で、ALTと楽しみながら、効果的な会話活動を行うことは、積極的に会話を継続しようとする態度を育成する上で、大変有効であると考えられる。

研究対象が基礎クラスの生徒であるため、会話文を考える時の支援として、ワークシートに流れのパターンを示し、新出言語材料が使えるように工夫した。そのため、会話はスムーズに流れたが、とっさの質問には答えられなかった。生徒が多くの英語表現を覚えることにより、とっさの質問に対応できるように、今後の研究を進めていきたい。

参考文献

- ・太田洋・柳井智彦 著 『“英語で会話”を楽しむ中学生 会話の継続を実現するKCGメソッド』 明治図書(2003)
- ・児島 邦宏 編 『中学校 少人数授業実施の手引』 明治図書(2002)
- ・浅沼 茂・松本 光弘 編著 『中学校 個に応じる少人数指導』 黎明書房(2002)
- ・文部科学省 『HANDBOOK FOR TEAM TEACHING』 ぎょうせい(2001)